

# 名人伝

なかじま あつし  
中島 敦

趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。己の師と頼むべき人物を物色するに、当今弓矢をとっては、名手・飛衛に及ぶ者があるとは思われぬ。百歩を隔てて柳葉を射るに百発百中するという達人だそうである。紀昌ははるばる飛衛を訪ねてその門に入った。

飛衛は新入りの門人に、まず瞬きせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織り台の下に潜り込んで、そこに仰向けにひっくり返った。目とすれすれに機躡が忙しく上下往來するのをじっと瞬かずに見つめていようという工夫である。理由を知らない妻は大いに驚いた。だいいち、妙な姿勢を妙な角度から夫にのぞかれては困るという。嫌がる妻を紀昌は叱りつけて、無理に機を織り続けさせた。来る日も来る日も彼はこのおかしなかつこうで、瞬きせざる修練を重ねる。二年ののちには、慌ただしく往返する牽挺がまつ毛をかすめても、絶えて瞬くことがなくなった。彼はようやく機の下からはい出す。もはや、鋭利な錐の先をもってまぶたを突かれても、まばたきをせぬまでになっていた。不意に火の粉が目飛び入ろうとも、目の前に突然灰神楽が立とうとも、彼は決して目をパチつかせない。彼のまぶたはもはやそれを閉じるべき筋肉の使用法を忘れ果て、夜、熟睡しているときでも、紀昌の目はクワツと大きく見開か

れたままである。ついに、彼の目のまつ毛とまつ毛との間に小さな一匹のくもが巣をかけるに及んで、彼はようやく自信を得て、師の飛衛にこれを告げた。

それを聞いて飛衛が言う。瞬かざるのみではまだ射を授けるに足りぬ。次には、見ることを学べ。見ることに熟して、さて、小を見ること大のごとく、微を見ること著のごとくになったならば、来って我に告げるがよいと。

紀昌は再び家に戻り、肌着の縫い目から虱を一匹探し出して、これを己が髪の毛をもってつないだ。そうして、それを南向きの窓に掛け、終日にらみ暮らすことにした。毎日毎日彼は窓にぶら下がった虱を見つめる。はじめ、もちろんそれは一匹の虱にすぎない。二、三日たっても、依然として虱である。ところが、十日余り過ぎると、気のせいか、どうやらそれがほんの少しながら大きく見えてきたように思われる。三月めの終わりには、明らかに蚕ほどの大きさに見えてきた。虱をつるした窓の外の風物は、しだいに移り変わる。熙々として照っていた春の日はいつか激しい夏の光に変わり、澄んだ秋空を高く雁が渡っていったかと思うと、はや、寒々とした灰色の空からみぞれが落ちかかる。紀昌は根気よく、毛髪の上にぶら下がった有吻類・催痒性の小節足動物を見続けた。その虱も何十匹となく取り換えられてゆくうちに、早くも三年の月日が流れた。ある日ふと気がつく、窓の虱が馬のような大きさに見えていた。しめたと、紀昌は膝を打ち、表へ出る。彼はわが目を疑った。人は高塔であった。馬は山であった。豚は丘のごとく、鶏は城楼と見える。雀躍して家にとって返した紀昌は、再び窓際の虱に立ち向かい、燕角の弓に朔蓬のやがらをつがえてこれを射れば、矢はみごとに虱の心の臓を貫いて、しかも虱をつないだ毛さえ切れぬ。

紀昌はさっそく師のもとに赴いてこれを報ずる。飛衛は高踏して胸を打ち、初めて「でかし

- 1 【趙】 古代中国の戦国時代の国名。
- 1 【邯鄲】 趙の都。
- 1 【紀昌】 伝説上の弓の名手。
- 2 【飛衛】 伝説上の弓の名手。
- 5 【機織り台】 布を織るための機械。
- 6 【機躡】 機織り機の踏み木。10 行めの「牽挺」も同じ。
- 11 【錐】 板などに小さな穴をあけるための道具。
- 13 【灰神楽】 灰の中に湯や水をこぼしたり、灰の入った入れ物をひっくり返したりして、灰が舞い上がること。
- 4 【著】 はっきりしていること。
- 6 【虱】 動物に取りついて血を吸う小形の昆虫。
- 11 【熙々】 穏やかなさま。
- 13 【有吻類】 はっきりとした口先部分のある動物などの総称。
- 13 【催痒性】 かゆみを引き起こす性質。
- 14 【節足動物】 節のある足を持つ動物。
- 17 【雀躍】 小躍りすること。
- 18 【燕角の弓】 燕の国の鹿の角で作った弓。
- 18 【朔蓬のやがら】 北方の地のよもぎで作った矢。
- 20 【高踏】 大きく足を踏み鳴らすこと。

たぞ。」と褒めた。そうして、直ちに射術の奥義秘伝を余すところなく紀昌に授け始めた。目の基礎訓練に五年もかけたかいがあって紀昌の腕前の上達は、驚くほど速い。

奥義伝授が始まってから十日ののち、試みに紀昌が百歩を隔てて柳葉を射るに、既に百発百中である。二十日ののち、いっばいに水をたたえた杯を右ひじの上に載せて剛弓を引くに、狙いに狂いのないのはもとより、杯中の水も微動だにしない。ひと月ののち、百本の矢をもって速射を試みたところ、第一矢が的に当たれば、続いて飛び来った第二矢は過たず第一矢の矢筈に当たって突き刺さり、更に間髪を入れず第三矢の鏃が第二矢の矢筈にガッシと食い込む。矢矢相属し、発発相及んで、後矢の鏃は必ず前矢の矢筈に食い入るがゆえに、絶えて地に落ちることがない。瞬くうちに、百本の矢は一本のごとくに相連なり、的から一直線に続いたその最後の矢筈はなお弦を銜むがごとくに見える。傍らで見ていた師の飛衛も思わず「よし！」と言った。

ふた月ののち、たまたま家に帰って妻といさかいをした紀昌がこれをおどそうとて烏号の弓に慕衛の矢をつがえきりりと引き絞って妻の目を射た。矢は妻のまつ毛三本を射切ってかなたへ飛び去ったが、射られた本人はいっこうに気づかず、まばたきもしないで亭主を罵り続けた。けだし、彼の至芸による矢の速度と狙いの精妙さとは、実にこの域にまで達していたのである。

もはや師から学び取るべき何もなくなった紀昌は、ある日、ふとよからぬ考えを起こした。

彼がそのときひとりつくづくと考えるには、今や弓をもって己に敵すべき者は、師の飛衛を

1 【奥義】その道や技のいちばん奥深くにある大事な秘密。

6 【矢筈】矢の端の、弓のつるにかける部分。

7 【鏃】矢の先のとがった部分。

8 【矢矢相属し、発発相及ぶ】矢が一本に見えるように連続してすばやく射ること。

10 【弦を銜む】弓のつるに連なっている。

12 【烏号】優れた弓の名。

13 【慕衛】優れた矢の産地。

15 【けだし】自分の推量ではほぼ間違いなく。

そかにその機会をうかがっているうちに、一日たまたま郊野において、向こうからただ一人歩み来る飛衛に出会った。とっさに意を決した紀昌が矢を取って狙いをつければ、その気配を察して飛衛もまた弓を取って相応ずる。二人互いに射れば、矢はそのたびに中道にして相当たり、ともに地に落ちた。地に落ちた矢が軽塵をもあげなかったのは、両人の技がいずれも神に入っていたからであろう。さて、飛衛の矢が尽きたとき、紀昌のほうはなお一矢を余していた。得たりと勢いこんで紀昌がその矢を放てば、飛衛はとっさに、そばなる野茨の枝を折り取り、そのとげの先端をもってハッシと鏃をたたき落とす。ついに非望の遂げられないことを悟った紀昌の心に、成功したならば決して生じなかったにちがいない道義的慚愧の念が、このとき忽焉としてわき起こった。飛衛のほうでは、また、危機を脱し得た安堵と己が技量についての満足とが、敵に対する憎しみをすっかり忘れさせた。二人は互いに駆け寄ると、野原のまん中に相抱いて、しばし美しい師弟愛の涙にかきくれた。

涙にくれて相擁しながらも、再び弟子がかかるくらみを抱くようなことがあっては甚だ危ないと思った飛衛は、紀昌に新たな目標を与えてその気を転ずるにしくはないと考えた。彼はこの危険な弟子に向かって言った。もはや、伝うべきほどのことはことごとく伝えた。なんじがもしこれ以上この道の蘊奥を極めたいと望むならば、ゆいて西の方大行の険によじ、霍山の頂を極めよ。そこには甘蠅老師とて古今をむなしゅうする斯道の大家がおられるはず。老師の技に比べれば、我々の射のごときはほとんど児戯に類する。なんじの師と頼むべきは、今は甘蠅師のほかにあるまいと。

紀昌はすぐに西に向かって旅立つ。その人の前に出ては我々の技のごとき児戯に等しいと

1 【郊野】郊外の野原。

4 【神に入る】人間ではできないくらいすばらしい腕前であること。

7 【非望】身分不相応の大きな望み。

8 【慚愧の念】自分の過ちを恥ずかしく思うこと。

8 【忽焉】突然であるさま。

12 【相擁する】互いに抱き合う。

13 【しくはない】及ぶものはない。

15 【蘊奥】学問や技芸の奥義。

15 【大行の険】大行山脈の険しい場所。

15 【霍山】山の名。

16 【甘蠅】伝説上の弓の名手。

16 【古今をむなしゅうする】昔から今に至るまで例がないほどの。

16 【斯道】この道。この分野。

17 【児戯】子供の遊びのようない。

言った師の言葉が、彼の自尊心にこたえた。もしそれが本当だとすれば、天下第一を目指す彼の望みも、まだまだ前途程遠いわけである。己が業が兇戯に類するかどうか、ともかくにも早くその人に会って腕を比べたいと焦りつつ、彼はひたすらに道を急ぐ。足裏を破りすねを傷つけ、危巖をよじ棧道を渡って、ひと月ののちに彼はようやく目指す山巔にたどり着く。

気負い立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔和な目をした、しかしひどくよぼよぼのじいさんである。年齢は百歳をも超えていよう。腰の曲がっているせいもあって、白髯は歩くときも地に引きずっている。

相手が聾かもしれぬと、大声に慌ただしく紀昌は来意を告げる。己が技の程を見てもらいたい旨を述べると、焦りたつた彼は相手の返事をも待たず、いきなり背に負った楊幹麻筋の弓を外して手に取った。そうして、石礪の矢をつがえると、おりから空の高くを飛び過ぎてゆく渡り鳥の群れに向かって狙いを定める。弦に応じて、一箭たちまち五羽の大鳥が鮮やかに碧空を切って落ちてきた。

ひととおりできるようじゃな、と老人が穏やかな微笑を含んで言う。だが、それはしよせん射之射というもの、好漢いまだ不射之射を知らぬとみえる。

ムツとした紀昌を導いて、老隠者は、そこから二百歩ばかり離れた絶壁の上まで連れてくる。脚下は文字どおりの屏風のごとき壁立千仞、はるか真下に糸のような細さに見える溪流をちょっとのぞいただけでたちまちめまいを感じるほどの高さである。その断崖から半ば宙に乗り出した危石の上につかつかと老人は駆け上り、振り返って紀昌に言う。どうじゃ。この石の上で先刻の業をいま一度見せてくれぬか。今さら引っ込みもならぬ。老人と入れ替わりに紀昌がその石を踏んだとき、石はかすかにグラリと揺らいだ。しいて気を励まして矢をつがえようとす

ると、ちょうど崖の端から小石が一つ転がり落ちた。その行方を目で追うたとき、覚えぬ紀昌は石上に伏した。足はワナワナと震え、汗は流れてかかとにまで至った。老人が笑いながら手を差し伸べて彼を石から下ろし、自ら代わってこれに乗ると、では射というものをお目にかげようかな、と言った。まだ動悸が治まらず青ざめた顔をしてはいたが、紀昌はすぐに気がついて言った。しかし、弓はどうなさる？ 弓は？ 老人は素手だったのである。弓？ と老人は笑う。弓矢のいるうちはまだ射之射じゃ。不射之射には、烏漆の弓も肅慎の矢もいらぬ。

ちょうど彼らの真上、空の極めて高い所を一羽の鳶が悠々と輪を描いていた。そのごま粒ほどに小さく見える姿をしばらく見上げていた甘蠅が、やがて、見えざる矢を無形の弓につがえ、満月のごとくに引き絞ってひょうと放てば、見よ、鳶は羽ばたきもせず中空から石のごとくに落ちてくるではないか。

紀昌は慄然とした。今にして初めて芸道の深淵をのぞき得た心地であった。九年の間、紀昌はこの老名人のもとにとどまった。その間いかなる修業を積んだものやらそれは誰にもわからぬ。

九年たって山を降りて来たとき、人々は紀昌の顔つきの変わったのに驚いた。以前の負けず嫌いな精悍な面魂はどこかに影を潜め、何の表情もない、木偶のごとく愚者のごとき容貌に変わっている。久しぶりに旧師の飛衛を訪ねたとき、しかし、飛衛はこの顔つきを一見すると感嘆して叫んだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我らのごとき、足もとにも及ぶものでない。

邯鄲の都は、天下一の名人となって戻ってきた紀昌を迎えて、やがて眼前に示されるにちがいないその妙技への期待にわき返った。

1 【覚えぬ】気がつかないうち。  
4 【動悸】心臓がどきどきと激しく動くこと。  
6 【烏漆の弓】黒いうるしを塗った弓。  
6 【肅慎】古代中国の東北部にいた民族で、狩猟を行っていたとされる。  
11 【慄然】体が震えるくらい恐ろしい様子。  
15 【精悍】たくましく、活動的に見えるさま。  
15 【面魂】しっかりした気持ちや、強い性質が表れている顔。  
15 【木偶】木彫りの人形。

4 【危巖】険しくそびえ立つ岩。  
4 【棧道】崖に沿って張り出すように、板を敷いて作った道。  
4 【山巔】山頂。  
6 【白髯】白い頬ひげ。  
8 【聾】耳が聞こえないこと。

9 【楊幹麻筋の弓】カワヤナギの幹に麻の糸を巻いた強い弓。  
10 【石礪の矢】古代中国にあった越という国の王が陣中で用いた矢。  
11 【一箭】一本の矢。  
14 【好漢】頼もしい男。  
15 【隠者】世間と関わることを避け、山奥などで暮らす人。  
16 【壁立千仞】岩が壁のように切り立ち、非常に深いこと。

ところが紀昌はいっこうにその要望に応えようとしない。いや、弓さえ絶えて手に取るうとしない。山に入るときに携えていった楊幹麻筋の弓もどこかへ捨ててきた様子である。そのわけを尋ねた一人に答えて、紀昌はものうげに言った。至為は為すなく、至言は言を去り、至射は射ることなしと。なるほどと、しごくものわかりのいい邯鄲の都人士はすぐに合点した。弓を取らざる弓の名人は彼らの誇りとなった。紀昌が弓に触れなければ触れないほど、彼の無敵の評判はいよいよ喧伝された。

さまざまなうわさが人々の口から口へと伝わる。毎夜三更を過ぎる頃、紀昌の家の屋上で何者のたてるとも知れぬ弓弦の音がする。名人の内に宿る射道の神が主人公の眠っている間に体内を抜け出し、妖魔をはらうべく徹宵守護にあたっているのだという。彼の家の近くに住む一人・羿と養由基の二人を相手に腕比べをしているのを確かに見たと言い出した。そのとき三人人の放った矢はそれぞれ夜空に青白い光芒を引きつつ参宿と天狼星との間に消え去ったと。紀昌の家に忍び入ろうとしたところ、塀に足を掛けたとたんに一道の殺気が森閑とした家の中から走り出てまともに額を打ったので、覚えず外に転落したと白状した盗賊もある。爾来、邪心を抱く者どもは彼の住居の十町四方は避けて回り道をし、賢い渡り鳥どもは彼の家の上空を通らなくなった。

雲と立ちこめる名声のただ中に、名人紀昌はしだいに老いてゆく。既に早く射を離れた彼の心は、ますます枯淡虚静の域に入ってしまったようである。木偶のごとき顔は更に表情を失い、語ることもまれとなり、ついには呼吸の有無さえ疑われるに至った。「既に、我と彼の別、是と非との分を知らぬ。目は耳のごとく、耳は鼻のごとく、鼻は口のごとく思われる。」というのが、

老名人晩年の述懐である。

甘蠅師のもとを辞してから四十年ののち、紀昌は静かに、誠に煙のごとく静かに世を去った。その四十年の間、彼は絶えて射を口にすることがなかった。口にさえしなかつたくらいだから、弓矢を取っての活動などあろうはずがない。もちろん、寓話作者としてはここで老名人に掉尾の大活躍をさせて、名人の真に名人たるゆえんを明らかにしたいのは山々ながら、一方、また、なんとしても古書に記された事実を曲げるわけにはゆかぬ。実際、老後の彼についてはただ無為にして化したとばかりで、次のような妙な話のほかには何ひとつ伝わっていないのだから。

その話というのは、彼の死ぬ一、二年前のことらしい。ある日老いたる紀昌が知人のもとに招かれて行ったところ、その家で一つの器具を見た。確かに見覚えのある道具だが、どうしてもその名前が思い出せぬし、その用途も思いあたらない。老人はその家の主人に尋ねた。それは何と呼ぶ品物で、また何に用いるのかと。主人は、客が冗談を言っているのみ思って、ニヤリとどぼけた笑い方をした。老紀昌は真剣になって再び尋ねる。それでも相手は曖昧な笑いを浮かべて、客の心をはかりかねた様子である。三度紀昌が真面目な顔をして同じ問いを繰り返したとき、初めて主人の顔に驚愕の色が現れた。彼は客の目をじっと見つめる。相手が冗談を言っているのでもなく、気が狂っているのでもなく、また自分が聞き違えをしているのでもないことを確かめると、彼はほとんど恐怖に近い狼狽を示して、どもりながら叫んだ。

「ああ、夫子が、——古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや？ ああ、弓という名も、その使い道も！」

その後当分の間、邯鄲の都では、画家は絵筆を隠し、楽人は瑟の弦を断ち、工匠は規矩を手にするのを恥じたということである。

6 【喧伝】しきりに言いふらすこと。  
7 【三更】現在の午後十一時から午前一時頃。  
9 【徹宵】夜通し。  
11 【羿と養由基】いずれも弓の名手。  
12 【光芒】光の筋。  
12 【参宿】オリオン座の中央部にある三つの星とその周辺の星。  
12 【天狼星】大犬座のシリウス。  
14 【爾来】それ以来。  
15 【十町】約一・一キロメートル。  
18 【枯淡虚静】名声や欲望にこだわる気持がなくなり、静かて落ち着いているさま。

4 【寓話】教訓的な内容を含んだたとえ話。  
4 【掉尾】文章などの最後。  
6 【無為にして化す】何の作為もなく人々を感化すること。  
16 【狼狽】思いがけないことのために驚き慌てること。  
16 【どもる】言葉がつかえること。  
17 【夫子】偉い人を敬っていう言葉。  
19 【瑟】古代中国の弦楽器。  
19 【規矩】コンパスとものさし。

【著者】 中島敦 (なかじま あつし)

一九〇九 (明治四二) 年—一九四二 (昭和一七) 年  
小説家。東京都の生まれ。

【著書】 『光と風と夢』 『李陵』 『山月記』 など